AICHI
PREFECTURAL
MUSEUM
OF
ART

MEMBERSHIP

愛知県美術館友の会 会報 第52号

空中回廊

コレクション展：20 世紀西洋美術の名品展
会員のひろば：アーティストトーク、特別鑑賞会、鑑賞会、美術館さんぽ
国際芸術祭「あいち 2022」紹介、理事会から
収蔵庫から：宮本三郎《裸婦》「隠された裸婦」

宮本三郎《裸婦》1937 年

愛知県美術館のコレクションによる

2022年4月1日～4月　日

20世紀西洋美術の名品展

モーリス・ドニ《花飾りの舟》（1921年）初公開

2020年11月に横浜で始まった「トライアローグ展」は、横浜美術館、愛知県美術館、富山県美術館の3館が所蔵する20世紀モダンマスターの作品が集結した展覧会でした。ご覧になられた方々は、多数のハイクオリティな作品を通して20世紀の西洋美術史を概観する展示に、日本の美術館のコレクションの充実度をあらためて実感されたのではないでしょうか。この展覧会が富山県美術館で1月22日に閉幕し、当館のコレクションは（愛知での会期も含め）約1年間の巡回を終えて帰還します。

fig.1 モーリス・ドニ《花飾りの舟》1921年　油彩、画布　愛知県美術館

展覧会の巡回中、当然ながら20世紀西洋美術の所蔵作品をコレクション展で展示することはできませんでしたが、その間に少しずつ新しい作品が仲間入りしました。2019年にはアニ・アルバースの版画集、2020年にはポロックの版画7点、リチャード・アーチェワーガーの立体作品《位置》（1969年、「ミニマル／コンセプチュアル」展に出品）、シュルレアリスムの美術雑誌『ミノトール』全巻（「ミニマル／コンセプチュアル」展同時開催のコレクション展で展示）、そしてモーリス・ドニ《花飾りの舟》（fig.1）が収集されました。4月1日から始まる20世紀の西洋絵画を特集したコレクション展では、従来の所蔵作品に加え、アルバース、ポロック、ドニが初公開されます。

なかでもドニの《花飾りの舟》は、2016年ムンクの絵画を購入して以来、久しぶりの西洋絵画の収蔵です。1年間の額と画面の修復を経て、満を期して公開されます。この作品は、ブルターニュ地方のプルマナックという港町で年に一度開催される海の祭りを描いたもので、ヨットやボート、漁船などが国旗で飾られて祝祭的な雰囲気に満ちています。風と波に洗われ、海岸に積みあげられた花崗岩の赤い巨大な岩がこの町のラウンドマークであり、画面左後ろに描かれています。前景の帆船の中央に立つのは法学生のジャン・ルシャルティエ、ドニの長男ドミニクの知人であり、この船の所有者です。ドミニクはこの作品に2度登場し、画面中央で水の中から船の縁へ足をかけている少年と、同じ船の左端でタルティーヌを食べている少年として描かれています。次男のフランソワは飲み物が入った瓶の手前に座り、やはりタルティーヌを手にしています。中景の舟は黄色いランタンとブルターニュを象徴するアジサイの花で華やかに飾られています。その中央に腰を掛ける赤いドレスを着た女性はエリザベツ・グラトロールで、ドニと彼女はこの作品が制作された

fig.2 モーリス・ドニ《波》1916 年　油彩、画布　大原美術館

fig.3 モーリス・ドニ《水浴》1920 年　油彩、画布
国立西洋美術館

1 年後に結婚しました。つまりこの作品は、プルマナックの海祭りの光景を借用しながら、ドニが好んだテーマである家族の肖像として朗らかに描かれたものです。

この作品はフランスのアカデミズムの画家エドモン・フランソワ・アマン＝ジャンの仲介により、1921 年に大原孫三郎が入手しました。現在大原美術館が所蔵するドニの作品は《波》（1916 年、fig. 2）1 点です。これは大原によってヨーロッパに派遣されていた洋画家の児島虎次郎が前年にドニのアトリエを訪問した際に、ドニの手元に残っていた唯一の作品でした。翌年追加購入された新作《花飾りの舟》に見られる日本の国旗は、ドニが日本のコレクターへの敬意を表すために描き加えたようです。作品は一旦パリのドリュエ画廊で行われたドニの個展に展示されたのちに日本に輸送され、1923 年「第三回西洋名画家作品展」（倉敷尋常高等小学校）で披露されました。その後 1930 年に開館した大原美術館に所蔵されていましたが、1936 年末に売却されます。海外に流出することなく日本の個人コレクターの手元に置かれていたため、当館はこの作品に巡り会うことができました。

さて、大原が西洋美術の収集に努めていた同時期に、もう一人の日本人コレクターがやはりドニの作品を購入しています。それが松方幸次郎で、彼が集めたドニの絵画 17 点は現在国立西洋美術館のコレクションに収められています。《水浴》（1920 年、fig. 3）ほか松方が購入した数点の作品は、やはりドリュエ画廊の個展に出品されました。数の上では松方に軍配が上がりましたが、ドニの作品群を含む松方のコレクションの多くは、戦後西洋美術館設立まで公開が待たれました。一方大原のコレクションは獲得後まもなく地元の岡山で展示され、人々が当時の同時代の西洋美術を享受できたことは、大原の大きな功績といえるでしょう。

このように《花飾りの舟》は、日本における西洋美術コレクション史、美術館史に位置づけられる重要な作品であることが分かります。そしてあらたに当館に収蔵されたことで、これから先多くの展示の機会を得て、数十年先、100 年先まで、この作品が人々に愛され続けることを願っています。

愛知県美術館 主任学芸員　森　美樹

会員のひろば

◆おうちでアーティストトーク＜佐藤 香菜 氏＞収録記◆

2021 年 8 月 29 日　　愛知芸術文化センターアートスペース EF にて

「おうちでアーティストトーク」の第二弾として、佐藤香菜氏と深山孝彰愛知県美術館副館長との対談を収録しました。

前回、設楽知昭氏の撮影はギャラリーに展示された作品を前にお話いただきました。しかし今回は作品が目の前になく、佐藤さんと深山さんのお話が頼りです。ドキドキしながら準備を進めていると、なぜかプロジェクターが作動せず大混乱。ケーブルに不具合があったので交換してもらい、予定時刻を大幅に遅らせての収録スタートとなりました。

佐藤香菜さんと深山副館長

この動画は会員限定で見られます

画面映りでは、バックが見苦しくならないようにホワイトボード 2 台を立てました。トーカーの配置にも悩みます。横並びにするとモニターを確認しづらいし、対面にすると撮影が難しい。結局くの字型に座っていただきました。カメラは正面のモニターを映す 1 台と、トーカーのお二人を映す 1 台の計 2 台を用意しました。

実は収録の際、いつもうまくいかないのが録音なのです。数回の失敗で学習し、今回はスマホ 2 台、録音機 1 台の計 3 台で挑みます。佐藤さんと深山さんの真ん中に録音機を設置し、両脇にスマホを 1 台ずつ置いたので、今回はいい録音ができました。

そしてもちろんお二方のお話も楽しく、実際の作品を拝見したくなりました。

無観客対談はとても難しく、次回はぜひ大勢の会員の方と参加したいです。

特別鑑賞会

「曽我蕭白　奇想ここに極まれり 」展

講師　由良　濯（あろう）氏（愛知県美術館学芸員）

2021 年 10 月 14 日（木）愛知芸術文化センターアートスペース EF にて

今回の特別鑑賞会も、午前の部と夜の部の 2 回行われました。アートスペースで由良濯学芸員による解説を聞いた後、会場で個別での鑑賞となります。午前の部は 90 分にもおよぶ丁寧な解説をしていただきました。残念ながら夜の部は時間の関係で 30 分に短縮されましたが、閉館後にギャラリートークをしていただきました。

蕭白の描く仙人や賢人は俗っぽく醜怪で不気味です。そして動物たちはどこか人間臭さを漂わせています。由良さんは「蕭白は文化人に対する批判と自己への批判を内在させながら制作した」と言っています。その苦悩が私たちに居心地の悪さを与えているようです。随所に隠された謎は内実には何を表現しているのか、図録で解答を確認しながらもう一度向き合ってみました。

図録に掲載した新説を詳しく解説する由良学芸員と熱心に聞く参加者たち

今回は近年発見された手紙が初公開されました。日本酒の「白雪」で知られる伊丹の酒造家にあてられた 2 通の手紙に現れる蕭白像は、傲岸不遜な奇人とは異なりとても微笑ましいものでした。

人数制限はありましたが、皆さんの楽しまれている様子が嬉しかったです。

豊田市美術館　鑑賞会　「モンドリアン展　純粋な絵画を求めて」

2021年8月7日（土）　講師　石田 大祐 氏（豊田市美術館　学芸員）

鑑賞会恒例のレクチャーは、展示会場とは別に設けてくださった講堂にて。何と、以前愛知県美術館でお世話になった高橋秀治館長もお見えで、近況、コロナ禍での会員活動と方向性、デジタルを使った活動の可能性などをお話することができました。

レクチャーでは縦横の線とシンプルな色使いが印象的な、教科書に載っているあの絵はどのような経緯で創作されるに至ったのか？神智学との関係は？など、スライドを見ながら解説していただきました。

レクチャー後に鑑賞すると、解説していただいた内容と照らし合わせて巡ることができました。

講師の石田学芸員
高橋館長からもお話しをいただきました

しかし観ていて「質問すればよかった」と後悔する点もありましたので、次回からは先に鑑賞してから、レクチャーを受けようと思います。

刈谷市美術館　鑑賞会　「野口哲哉　this is not a samurai」展

2021年9月26日（日）　講師　神谷　剛生 氏（刈谷市美術館　学芸員）

会場は鎧をまとう人々の彫刻や絵画など代表作180点が展示されています。ロビーで神谷学芸員の解説を聞いた後、各々が展示室に移動しました。

野口さんは子供のころに初めて甲冑を見た時、人間の抜け殻に見えてとても怖かったそうで、それ以来鎧兜に魅せられていったそうです。精巧に作られた立体作品は、

ひとつひとつ表情も異なり、作るのに数か月かかることもあるそうです。現代人に甲冑を着せた作品はユーモラスですが、そこに込められた人間の苦悩は決して軽いものではありませんでした。

ポスターに掲載されている≪WOODEN　HORSE≫は、甲冑を着た男が遊具の木馬にまたがって、うつろに空を見上げているような作品です。高さおよそ22センチ。このサイズの中で、武具をすべて精密に再現しています。

今を生きる現代人と過去に生きた侍。見えない鎧をまとった現代人と、重い甲冑をまとった侍は、生きた時代こそ違いますが、抱えている重荷は変わらないということに思いを巡らせました。

美術館さんぽ

2021年12月19日（日）

古川美術館「印象派とエコールドパリ」展と爲三郎記念館（旧古川爲三郎邸）をめぐる鑑賞会

新企画「美術館さんぽ」で古川美術館に行ってきました。

「美術館さんぽ」とは、小さな美術館やギャラリーなどを、お散歩がてらにみんなで見て回ろうという企画です。ひとりではなかなか行きにくい展覧会を一緒に見に行きましょう。

STILL ALIVE
国際芸術祭 あいち2022
2022.7.30–10.10

愛知芸術文化センター

◆ 期　　間：2022 年 7 月 30 日（土）～ 10 月 10 日（月・祝）（73 日間）
◆ 芸術監督：片岡真実（森美術館館長、国際芸術会議（CIMAM）会長
◆ 主な会場：愛知芸術文化センター、一宮市、常滑市、有松地区（名古屋市）
◆ 主　　催：国際芸術祭「あいち」組織委員会
◆ 公式 Web サイトアドレス： https://aichitriennale.jp/

いよいよ 2022 年 7 月より、国際芸術祭「あいち2022」が開催されます。記者会見では、新しい芸術祭を作り上げるという、片岡真実芸術監督の熱い思いを感じました。その思いは会場や参加アーティスト、ラーニングプログラムからも、窺い知ることができます。発信されている情報を自ら獲りに行き、「明日を生きるためのポジティブなエネルギーにつながる、心躍る出会いや体験の場（コンセプト・要約より）」を楽しみましょう！！

● 友の会会員には、黒田和士氏（愛知県美術館学芸員）が 2021 年 12 月の友の会講座「河原温とコンセプチュアル・アート」として、講義をしてくださいました。

SNS	アカウント	QRコード
Twitter	@Aichi2022	
Facebook	Aichi2022	
Instagram	aichi2022	
YouTube	https://www.youtube.com/channel/UCkBaVn7_cuCnuUcHrnq6E2A	

愛知芸術文化センター

主な会場

一宮市

常滑市

有松町

愛知芸術文化センターの画像：提供元「愛知芸術文化センター」 一宮、常滑、有松の画像：提供元「国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局」

宮本 三郎《 裸 婦 》

隠 さ れ た 裸 婦

2022 年度第一期コレクション展では、新収蔵作品の宮本三郎《裸婦》を初めて公開します。新収蔵というと、購入や受贈によって美術館が新しく取得した作品のことを指すことが多いですが、実は《裸婦》は開館当時からずっと当館の収蔵庫にあった作品です。しかし、誰もその存在を知りませんでした。《裸婦》は、当館所蔵品である同作家の《家族》（1956 年）のキャンバスの下に、長い間隠れていたのです。

2021 年の春頃、コレクション展の準備のために、近代洋画作品の額縁や裏面、ラベルなどの調査をおこなっていたところ、《家族》のキャンバスが 2 枚重なっていることに気付きました。油彩画のキャンバスが 2 枚重なっていることは、必ずしもおかしな事ではありません。なぜなら、下層のキャンバスは作品の補強のための裏打ち布である可能性があるからです。画面の損傷が激しいものや布の厚みが薄い作品は、取り扱いの時にキャンバスが振動することで傷みが進行する危険性があります。そこで揺れを軽減するために背当てのように補強用の布を一枚張るという処置をすることがあり、これを裏打ちと言います。もし《家族》の下に張られているのが裏打ち布だったなら、わざわざ剥がす必要はありません。そのため、慎重にその布の正体を調査しようと裏面を観察してみると、キャンバスに凹凸が見られました。おそらく表側に塗られた油絵具が乾燥し、収縮したことでキャンバスの引き攣れが起きていると考えられますが、この凹凸が《家族》のイメージとは

宮本三郎《家族》1956 年　油彩・画布　106.4cm×106.4cm

一致しなかったので「別の絵があるのかもしれない」という可能性が高まり、その後さらに調査を重ねた上で、剥がしてみようと決断しました。

こうして新たな作品が見つかったため、画面右下に書かれている制作年をもとに調査をおこなったところ、1937 年の第 24 回二科展に出品された《裸婦》であることがわかりました。宮本は同展に《裸婦》のほか《牛牽く女》、《蚊帳》など複数点出品していましたが、《蚊帳》以外は所在が明らかになっていませんでした。当館が《家族》を収蔵したのは 1976 年、美術館の前身である文化会館時代のことです。少なくとも 45 年間は誰も《裸婦》の存在を知らなかったということになります。

ここに掲載したのは、発見当時の画像です。髪の毛や目、敷物など黒い部分を中心にカビが生えているほか、顔料の亀裂やキャンバスの波打ちなど、いくつもの損傷がみられます。ここから時間をかけて調査、修復をおこない、2022 年 4 月には皆様にお披露目できる運びとなっていることでしょう。　　桒名　彩香

学芸員の横顔

桒名 彩香 *-Ayaka Kuwana-*

職名：保存担当学芸員

今年は、相棒である作業台車に轢かれて足を3針縫うという悲しい出来事があり、その後《裸婦》を発見するという嬉しい出来事がありました。ちゃんと相殺されるものですね。

理事会から

私たちの愛知県美術館の「コレクション展」を楽しむ

愛知県美術館の広報誌として「ＡＡＣ」という愛知芸術文化センターの情報誌があります。年４回発行されていて、芸術劇場のニュースや美術館の企画展・新コレクションや作家の紹介など、盛りだくさんに掲載されています。

本誌「空中回廊」は愛知県美術館友の会が企画・発行しており、年２回発行する「会報」ではあるものの、内容としては愛知県美術館の広報誌という役割も担っていると自負しています。表紙には県美のコレクションの中から学芸員さんに１点選んでいただき、詳しい解説も誌面に添えて紹介しています。学芸員さんのみならず館長さんや会員さんから寄稿をいただいたこともあります。今までは企画展の紹介のため、担当学芸員さんから「みどころ」などを教えていただき掲載してきましたが、「ＡＡＣ」との重複も多く、年間２回の発行ではタイムリーに紹介できない状況でした。そこで企画展と同時開催しているコレクション展を詳しく紹介することに重点を置くようにしました。

コレクション展は、美術館が所蔵する膨大な所蔵品を元に、学芸員さんたちが独自の切り口で組み立てるもので、企画展とともに大切な展覧会の一つでもあります。これを詳しく紹介していくことも友の会の役割の一つであると考え、51 号では平瀬礼太企画業務課長から「洋画特集」展について詳しく紹介していただき、キャンバスの裏側を探った結果など、これまでには見られない展示を楽しむことができました。

企画展も楽しみですが、愛知県民の財産であるばかりでなく、世界的にも貴重な財産を生かしてコレクション展を作り上げた学芸員さんたちの意図やねらいを楽しく味わっていただけたらと思います。

愛知県美術館友の会　会長　小林克敏

定例活動

2021 年 8 月～ 2022 年 3 月

所蔵品管理	モニター	発 送	受付[講座・イベント]	広 報	ホームページ	理事会
0 回	2 回	3 回	8 回	3 回	随時更新	5 回

第52号 友の会活動紹介

2021 年 8 月～ 2022 年 3 月

- 8 月 ・鑑賞会　豊田市美術館「モンドリアン展」
- 9 月 ・おうちでアーティストトーク　動画配信
  佐藤香菜氏・深山副館長
  ・鑑賞会　刈谷市美術館「野口哲哉」展
- 10 月 ・特別鑑賞会「曽我蕭白」展
- 11 月 ・定例活動のみ
- 12 月 ・友の会講座「河原温とコンセプチュアル・アート」
  講師：黒田和士学芸員
  ・美術館さんぽ　古川美術館、爲三郎記念館
- 1 月 ・特別鑑賞会「ミニマル／コンセプチュアル」展
- 2 月 ・美術館さんぽ　瀬戸市美術館　愛知県陶磁美術館
- 3 月 ・企画展鑑賞会　古川美術館、爲三郎記念館、周辺

友の会 これからの活動予定

（変更が生じる場合があります）

- 4 月 ・特別鑑賞会「ミロ展」

日時未定ですが鑑賞会・講座なども計画中です

これからの展覧会のご案内

愛知県美術館コレクション展
20世紀西洋美術の名品展
4月1日~7月3日

ミロ展 日本を夢みて
4/29 fri. –7/3 sun.
開館30周年記念 Joan Miró and Japan

STILL ALIVE
国際芸術祭 あいち2022
2022.7.30–10.10

編集後記

毀誉褒貶（きよほうへん）の激しいビッグボス。しかし考え抜いたアイデアを明るくパワフルに実践する姿が、一歩踏み出す力を与えてくれます。

□編集　松下智子　稲垣真美代／喜田泉／小林克敏／冨永晃一／森健次
□協力　愛知県美術館
□発行　2022年3月

友の会入会のご案内

詳しい活動内容を知りたい方、入会をご希望の方は事務局（下記）までお問い合わせください。入会のご案内パンフレットやホームページでも詳しく紹介しております。ぜひご覧ください。

受付場所　★愛知県美術館 10 階受付
★友の会事務局　★振込も可

愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜一丁目 13-2
愛知県美術館内（愛知芸術文化センター 10 階）
info@apmoa-tomo.com
ホームページへのアクセスはこちらから
愛知県美術館友の会　検索
apmoa-tomo.com
tel. 052-971-5511（代）
fax. 052-971-5617
（火・木　11:00~15:00）
twitter @apmoafriends

Art Direction:Masaru Nakada Design & Layout: Katsutoshi Kobayashi